

「(仮称) 生物多様性ちば県戦略」専門委員会提言(案)

はじめに

生物多様性ちば県戦略は、地域における生物多様性保全の戦略策定の一環として千葉県によって全国に先駆けて2006年10月に企図された。専門委員会での議論と並行して20回に及ぶタウンミーティングが県内各地で開催され、それらの議論も踏まえて集中的に議論が進められた結果2007年3月に5ヶ月という短時間で策定作業を終了できた。

生物多様性は、単に生物種そのものの重要さだけではなく、それが支える生態系機能によって人間の豊かで、持続的な生活を可能にしているという点で、われわれの生存にとって欠くことのできないものである。

多様で、豊かな生物は、四季おりおり、細やかな千葉の山河や海のすみずみまで多様な生命の営みの豊かさと不思議さを与えてくれる。農作業や育林作業の合間にふと目にとまる美しい自然、風の安らぎ、馥郁と香る稲の穂ばらみ、刈り取った草いきれのなかで飲むお茶の香り。素足で入る干潟の生命の豊かさ、魚網にずっしりと感じる海の恵みなど、生物多様性と生態系の豊かさこそ、われわれ自身の生命の躍動を実感する瞬間でもある。

生物多様性には、国境も、県境もないが、地域の生物多様性の成立には、それぞれの地域の自然条件に加えて、歴史、生活、文化など人間活動に応じて形作られてきた独自の成立基盤が存在すると同時に、今日危機の構造がみられる。したがって具体的な保全の実効性を高めるためには、国、県、さらには市町村などそれぞれの地域における個別の取り組みがきわめて重要である。

とくに県土の約半分が農耕地、さらにその残りの%が居住地域である千葉県では、全国の土地利用の平均的なパターンとは大きく異なっており、生物多様性の保全には農林水産業との調和した取り組みが不可欠である。東京から近く、100年以上も前から有名な植物採集地であった千葉県は、県土のなかにちりばめられた宝石のようにゆたかで、地域に独自の植物相がみられる。わが国の天然記念物制度が制定され、大正9年に指定された最初の天然記念物指定地となった全国10カ所のうち2ヶ所は本県にあることから、千葉県の身近な自然の重要性と全国的な価値が理解できる。

とくに伝統的な農林業とともに育まれてきた房総丘陵の里山には、人間活動と調和しながら多くの生物が共存し、その多様性を高めてきた。本来、人々とともに生きる喜びを分かち合っ

てきたはずのニホンザルやニホンジカが問題となっている。北総地域は、多くの貝塚や古墳からも知られるように、古くから内湾の恵みに多くの人々が暮らし、ゆたかな水運を利用した産業、牧や新田開発など、時代とともにめまぐるしいほど人々の生活と自然の関わりが移り変わってきたが、巨大な機械力による開発がはじまり過去の自然の営みは消え去ろうとしている。

また、四周を海と河川によって明確に隣接都県と境されている千葉県では、漁業などに依存して生活してきた人々も多く、東京湾は、大都市における人々の生活を支える内湾生態系として機能し、恵みをもたらしてきた。最近では里海と呼ばれ、水体の恵みや健全な生態系としての機能が、多様な生物の働きによって維持され、また資源としても持続的に供給され、人々の生活を支えてきたということから、自然と人間活動との調和的関係の重要性が広く理解されるようになってきた。

本戦略によって、こうした千葉県の生物多様性と人々の生活とのかかわりの重要性、多様な生物との交歓のすばらしさが県民に広く認識され、その保全に向けてさらに確実な一步を踏み出すきっかけになれば幸いである。

要旨

第1章 戦略策定の趣旨

生物多様性の一構成要素にすぎない人類の活動が、地球上の遺伝的多様性と種多様性の危機を著しく高めてきてしまった。また、生物多様性の減少に伴うさまざまな生態系機能の劣化や土地利用変化にともなう生態系の多様性の減少は物質的な側面だけでなく、気候変化や水循環などの調節的機能の劣化、人々の自然に対する感性や人間自身の豊かな精神性や文化の崩壊などを介して、人類の生活を脅かしはじめている。

将来にわたって持続可能で、健全で、ゆたかで、安全な生活を保障するためには生物多様性とそれにかかわるさまざまな生態系機能が十分に発揮されるように、生物種と生態系の保全が緊急の課題となりつつある。

生物多様性の減少は、本来、生物が担ってくれていた再生可能で、自律的で、大きな緩衝機能を有する生態系機能の喪失を意味し、ひいては人類の生存環境を著しく劣化させている。最近の地球温暖化を含むさまざまな自然現象は、人類にとって大きな社会的、経済的負担を強いるものとなりつつあるが、当然、こうした地球規模での生態系機能は、一度失われてしまえば、人類の力だけでは到底作り出すことなど出来ない。最近どこかの国で作られたという「なにやら再生推進法」という法律ほど不遜なものはないのである。

最近、報告書が出版されたミレニアム生態系評価(2005)において行われた全球規模評価(グローバルアセスメント)では、科学的手法によって世界の生態系の現状が評価され、将来の傾向が予測された。その結果、現在の地球においては、人類の活動によって生物種の絶滅速度が、化石記録によるバックグラウンド速度の1000倍に達することが示され、生態系によるさまざまなサービスが失われつつあり、このまま進行すれば、もはやわれわれの生活を持続的に維持することが困難になりつつあることが示された。

そうしたなかで、生物多様性の減少の原因となり、かつ生態系機能を劣化させてしまう人間活動を科学的に解明し、戦略的にそれに対処する方策を確認し、行動に結び付けていくことが、世界的にも、日本においても、さらにまた、千葉県を含めて、それぞれのセクターに対しても課せられた緊急の大きな責務となっている。

生物多様性の減少を引き起こす動因(ドライバー)として、ミレニアム生態系評価では、間接的動因と直接的動因を区別する。人類の福祉を支える生物多様性と生態系サービスに影響を与える直接的動因としては、土地利用変化、外来種の侵入、科学技術の適応と利用、外来技術の導入、資源の収奪や消費、気候変化、およびその他の自然的・物理的・生物的要因などがある。それらの要因は間接的動因としての人口変動、経済情勢、社会政治的要因、科学技術、文

化・宗教的要因と分ちがたく結びついており、またそれらの要因によって間接的に影響を受けている部分も含んでいる。これら二つの動因が、直接人類の福祉や安全に影響を与えるが、とくに直接的動因は、遺伝子、種、生態系の生物多様性の全てのレベルの多様性を減少させ、その結果人類に対する生態系の供給的、調節的、文化的、基盤的サービスの劣化を引き起こし、人類の福祉と貧困の撲滅に負の影響を与えることが示された。

とくに千葉県では、県土の半分は、農林業というかたちで、直接、生態系機能に依存しており、沿海部は、漁業というかたちで海洋生態系の生物多様性と機能に強く依存しているということからすると、県民の生活そのものが、大きく生態系機能（生態系サービス）に依存しているといえる。そのことから、生物多様性を保全し、生態系の健全さを戦略的に守ることが、県民の生存を含めあらゆる活動にとって重要であり、千葉県の将来を左右する重要な問題であるかが理解できるであろう。

本専門委員会ではこうした認識に立って、生物多様性ちば県戦略の策定に取り組んできた。専門家と多くの県民がタウンミーティングなどを通してかかわったとはいえ、本来、県庁の全部局が主体的な形でかかわって、緊急に策定すべき戦略の作成であったが、限られた時間と人員のなかで十分検討できていない部分も依然として散見される。今後、問題の緊急性と重要性にかんがみ、早急に県庁内の体制作りを進めて、県民とともに戦略を実効性のあるものとしていかねばならないが、とりあえず急ぎ取りまとめたのが、この戦略である。

第2章 生物多様性とは

生物多様性とは、地球上に存在するすべての生物の変異を指す言葉である。これには遺伝子、生物種、生態系の3つのレベルにおける変異が含まれている。

地球上の生物多様性は、約40億年前に生命が誕生してから現在にいたる生物進化のたまものであり、人類は生物の多様性なくしては一日たりとも生き続けることはできない。穀物や野菜、果物、魚介類、家畜などの食料、スパイスや香料、抗癌剤として使われる植物などの生物資源は、すべて生物多様性からの恵みであるが、私たち人類は地球上の生物多様性のその一部を利用しているに過ぎない。1千万～1億種といわれる地球上の生物種のうち、人類が識別できているのは150～170万種に過ぎないのである。

一方、千葉県の生物多様性は、人々のくらしと密接な関係にある。千葉県には高等植物2500種、蘚苔類400種、菌類、藻類などを含めてxxx種が記録されている。動物種は・・・生態系レベルでは海から山に至る多様な生態系がみられ、これらは生物資源の源泉であると同時に、水源涵養、洪水調整、土砂流出防止などのさまざまな生態系機能を通じて、人々のくらしを支えてきた。また人々は、谷津田、台地上の畑、雑木林、茅場などの里山、干潟や、磯、砂浜などにおいて海の恵みを利用した里海と呼ばれる二次的自然を作り上げ、生態系レベルの多様性を高めてきた。

第3章 生物多様性の保全目標

1. 生物種の絶滅を回避し、遺伝子の多様性の消失を防止するとともに、房総半島の生物が安定的に生息・生育できる自然環境を回復することを目標とする。
2. 生物多様性の恵みを、私たちの世代で枯渇させることなく、将来の世代にさらに豊かな状態で引きつぐため、持続可能な資源利用と循環型社会を実現することを目標とする。
3. 房総半島の里山・里海に支えられた、人と自然と文化が調和する社会を実現することを目標とする。